九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

法称著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』第1章現量(知覚)論の和訳（2）

戸崎, 宏正

https://doi.org/10.15017/2328547

出版情報：哲學年報. 46, pp.1-12, 1987-02-28. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

法称著『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』

第1章　現量（知覚）論の和訳（2）

戸　崎　宏　正

目　　次

IIIe1　比量の必要性を論証する――チャールヴァーカ説の論破
IIIe2　論証（1）
IIIe3　論証（2）
IIIe4　論証（3）
IIIf　比量の量性を論じる
IVa　現量の定義
IVb　名辞分別が感官知にないことの論証
IVc　論議応酬

［IIIe1］(34.19) 他の者たち（＝チャールヴァーカ[1]）は，現量でない量は存在しないと主張するが，それは不合理である。

（i）（かれら自身）量と他（＝量でない知）を一般相によって確定するから，（ii）また他（人）の知を認識する（ことがある）から，（iii）また或るものを否定する（ことがある）から，（現量以外の）他の量も存在する（と認めるべきである）。（2）

［IIIe2］(36.1) かれらが「現量のみが量であり，比量は（量では）ない」と述べる（とき，それは実は）或る個なる知が（かれの）行動にさいして，欺くか欺かないかを（かれ自身において）認識したのち，その特相を全体に当ては

（1）PVinT (D), 30b[8], PVinT (B), 38.4: tshu rol mdzes pa (=Cārvāka).

めて――（かれの）教示に従って行動する者を惑わさないように――述べているのである。それ（＝量であるか量でないか[2]）は（個々の知の）共通性を見ることによって，そのように確立されたのであり，比量されべきもの以外の何ものでもない。しかもそれ（＝「量である，あるいは量でない」と決定するその比量[3]）は（汝によれば量と）確立されないから，「量であるか量でないか」（を教示しても意味）がないことになろう。（それは）個々の対象領納――それらは（人に）伝えることの出来ないものであるが――（によって自らが知る）以外には（知られないであろう）。さらに自己の相続（svasantāna）にあって表示され（え）ないそれら（＝個々の対象領納）によっても，これ（＝量であるか量でないか）を他人に言語伝達することはできないから，論書（――量であるとか量でないとかを教示する論書[4]――）は著されえない（はずである）。もし著すならば，それは自らの行動（＝量であるとか量でないと教示する行動）を自らの言葉によって嘲笑している（に他ならない）[5]。

（2） PVinT (D), 33a$^{2-3}$: de ni shes bya ba ni tshad maḥam tshad ma ma yin paḥo.

（3） PVinT (D), 33a^{5}: rjes su dpag pa de yaṅ…

（4） PVinT (D), 34b^{4}: tshad ma daṅ tshad ma ma yin pa ñe bar ston paḥi bstan bcos; PVinT (B), 41.1-2:「他人に行動を起こさせる因である“量・非量の教説”（をなす）論書」（gshan ḥjug paḥi yan lag tu tshad ma daṅ tshad min ṅe bar ston paḥi bstan bcos.）

（5） PVinT (B), 41. 3:「自らの言葉と矛盾するから」（raṅ tshig ḥgal baḥi phyir.）; PVinT (D), 34b^{6}-35a^{1}:「他人に理解させるために『現量は量であり，比量はしからず』と言明することは，それ自身によって否定される。そのような言明は比量によって認識したのちにある（はずである）から，それゆえに，それ（＝比量）が量でないとき，それ（＝「現量が量であり，比量が量でない」と言明すること）も（ありえ）ない，と言うべきである。それゆえに，「比量は量でない」と言うことは，「自ら述べたこと（＝比量は量でないこと）はそのようでない（＝正しくない）」と言う（ことに他ならない）であろう。このようにして，また自らの行動を嘲笑することになろう。（gshan rtogs par bya baḥi don du mṅon sum tshad ma yin gyi, rjes su dpag pa ni ma yin no shes brjod pa de ñid raṅ ñid kyis bkag par ḥgyur ro. gaṅ gi phyir rjes su dpag pas rtogs nas de skad brjod pa yin pa des na de tshad ma ma yin na de yaṅ med par brjod

［Ⅲe3］(36. 13) また，他人をして理解せしめるために論書を著す場合に，「比量を放棄する」と言うことは合理でない。なぜならば，もしその比量を放棄するならば，（その論書の意味を理解するはずの他人に心があること——それは比量によって知られるはずであるのに——も知られないことになる[6] ので，その著作）活動も無益となろうから。

（もし「知は身体と異ならないし，しかも身体は現量によって把握される。したがって他人の心を認識するために比量は不必要である」と言うならば，[7]）身体は知ではない。なぜならば，それ（＝身体[8]）が（現量によって[8]）認識される場合でも，知の差別について疑いがあるから。他（人）と結びついたそれ（＝知の差別[9]）はただの（普通の[10]）人間によっては直接に認識されない[11]。

［Ⅲe4］(36. 20) かれ（＝チャールヴァーカ）は或るものの否定をなすが，

---

par ḥgyur ro. deḥi phyir rjes su dpag pa tshad ma ma yin no shes smras pa ni gaṅ bdag gis brjod pa de ni de lta ma yin no shes bya bar ḥgyur la, de lta na yaṅ raṅ gi ḥjug pa la co dris par ḥgyur ro.)

(6) PVinT (B), 41. 4:「量であるその比量を放棄するならば，それ（＝比量）によって決知されるはずの他人の心も“存在しない”と決知されるか，或は“おそらく存在しないだろう”と疑われるので，著作活動も無益となろうから。(rjes dpag de tshad ma yin pa spoṅ na des ṅes par byas paḥi gshan sems kyaṅ med par ṅes paḥam phal cher med sñam du the tshom za bas bstan bcos byed pa la ḥjug pa ḥbras bu med par ḥgyur baḥi phyir ro.) 同様の主旨が PVinT (D), 35a³ ff. に見られる。

(7) PVinT (B), 41. 5:「知は身体とは異ならないし，身体の把握は現量によって成就される，と言うならば，……」(blo lus las tha dad med pas lus ḥdzin mṅon sum grub bo she na…) なお PVinT (D), 35a ⁷⁻⁸ 参照。

(8) PVinT (D), 35a⁸-b¹: lus de grub ste mṅon sum gyis ṅes kyaṅ; PVinT (B), 41. 6: gshan lus de mṅon sum gyis grub kyaṅ.

(9) PVinT (D), 36b⁴⁻⁵: the tshom du gyur paḥi bloḥi rnam par brtag pa de; PVinT (B), 41. 7: bloḥi khyad par de.

(10) PVinT (D), 36b⁵: skyes bu tha mal pa skyes bu tsam; PVinT (B), 42. 1: tha mal paḥi skyes bu tsam.

(11) この第2の論証［Ⅲe3］については PV Ⅲ（現量章）68（拙著『仏教認識論の研究』上巻，大東出版社，昭和54年，p. 138）参照。

（その否定を）現量によってなすことはできない。なぜならば，（現量は）対象の力を必要とするので，無（＝否定）がそれの対象であることは矛盾であるから。なぜならば，もし（対象の力を）必要としないならば，（現量は）障害等がある存在物に対しても生じるという過失におちいるから。

もし現量が，（自らの）不起（nivṛtti）によって，存在物の無を決知させる，と言うならば，「それ（＝現量[12]）は存在しないのに，それ（＝現量[13]）は認識する」という（ことになるが，）それは矛盾[14]である。

（また）それが起こらないとき，何によって「（対象は）存在しない」と（決知されるであろう）か。（決知されないであろう。）なぜならば，（現量が起こらないからといって対象の非存在を）決定することは（でき）ないから。

（決定が）あるとしても，（その場合は）まさにそれ（＝現量の不起）は雑乱（vyabhicāra）のない“不認得”（anupalambha）である（はずである）。それ（＝不認得）はそれゆえに（＝無雑乱のゆえに）非存在に対するまさに証因である。（したがって，“現量の不起”にもとづく“対象の非存在”の決知は比量に他ならない[15]。）

［Ⅲf］（38.1）もし「或る（比量）は欺くことがない（avisaṃvāda）としても，それ（＝3相を具した因にもとづくこと[16]）を自体とした（比量）には雑乱があることが経験的に知られるから，（比量には）信憑性（āśvāsa）はない」と言うならば，（そのようなことは）ない。（それは汝らが）それ（＝証因[17]）の本質を知らないからである。本有的関係（svābhāvikasambandha）が証因

---

(12) PVinT (B), 42. 6: yul de ḥdzin paḥi mṅon sum de.

(13) PVinT (B), 42. 6: mṅon sum des.

(14) PVinT (D), 38a²: ñams pa ni ḥgal baḥo; PVinT (B), 42. 7: ñams so ste ḥgal lo.

(15) この第3の論証［Ⅲe4］については，PV Ⅲ, 65c-67（上掲拙著, pp. 136-138）参照。

(16) PVinT (D), 39a³: deḥi raṅ bshin can te tshul gsum paḥi rtags las skyes pa; PVinT (B), 43. 4: tshul gsum rtags las don rtogs deḥi raṅ bshin can.

(17) PVinT (D), 39a⁸; PVinT (B), 43. 6: rtags de.

(liṅga) の特相である。それ（＝証因[18]）には雑乱はない。なぜならば，それ（＝有証因，所成法[19]）が存在しないとき，（証因[20]）それ自身も存在しないから[21]。

同様に，

> 現量も対象が存在しないとき生じないから量である。（所成法との[22]）本有的関係がある（pratibaddhasvabhāva）（証因[23]）がそれ（＝比量）の因であるから，両者（＝比量と現量）は同等である。（3）

現量も対象に対して欺くことがないから量である。また，（それが）欺かないということは，（現量が）それ（＝対象[24]）から生じるということによる。他（なる或るもの）から生じるものも生じないものも，それに対して決して欺くことがないということは，不合理である。

もし「現量が対象に対して欺かないのは，“対象が存在しないとき生じない”からではない。そうではなくて，“対象を（直接に）知覚する”からである[25]」と

---

(18) PVinT (D), 39b^{2}; PVinT (B), 43. 7: rtags de.

(19) PVinT (B), 44. 1: bsgrub byaḥi chos de. Cf. PVinT (D), 39b$^{3-4}$.

(20) PVinT (D), 39b^{4}: rtags kyi raṅ gi ṅo bo.

(21) PV Ⅲ, 69（上掲拙著, p. 139）参照。

(22)(23) PVinT (D), 40a$^{2-3}$: bsgrub par bya baḥi don daṅ ḥbrel paḥi raṅ bshin gyi rtags; PVinT (B), 44. 3: bsgrub byaḥi chos daṅ ḥbrel paḥi ni raṅ bshin gyi rtags.

(24) PVinT (D), 40a^{7}; PVinT (B), 44. 5: don de las.

(25) PVinT (D), 40b$^{6-8}$:「対象の自性を現前に知覚するから，それゆえに対象に到達する（＝欺かれない）のである。しかし比量によっては，いかなる対象も（直接）知覚されない。それゆえにどうして（対象に）到達するであろうか。到達することはない。それゆえに，（比量は）量ではない。それゆえに，敵者はこのように，対象の自性を知覚するか知覚しないかによって，量であるか量でないかを確定する。」(gaṅ gi phyir don gyi raṅ bshin mṅon sum du mthoṅ ba deḥi phyir don thob par byed pa yin na, rjes su dpag pas ni don cuṅ zad kyaṅ ma mthoṅ ste, des na ji ltar thob par byed pa yin, thob par byed pa ma yin pa de ñid kyi phyir tshad ma ma yin no. deḥi phyir de ltar gshan gyis don gyi raṅ bshin mthoṅ ba daṅ ma mthoṅ ba dag las *-tshad ma daṅ-* tshad ma ma yin pa rnam par bshag pa na. *-* *P* に欠。*C* によって補った。)

いうならば，（しかしその場合）その“対象の知覚”とは（知覚される）対象であるのか，あるいは知であるのか。もし（知覚される）対象であると言うならば，すべての対象は現量されるもの（pratyakṣa）となるから，すべて（の対象[26]）がすべて（の人間[27]）によって知覚されることになろう[28]。もし知であると言うならば[29]，どうして一方（＝知）が存在するとき，関係のない他（＝対象）が必ず存在する（ということがある）であろうか。もし「（関係はなくとも知によって対象を）知覚するから（対象は）存在すると確立される」と言うならば，（しかし）“知覚”というこれは何であるかと，まさにそれ（＝知覚）が（いま）詰難されているのではないか。

[30]-それゆえに，知の存在によって対象の存在が許されるからには，知はそ

---

(26) PVinT (B), 45. 3: don thams cad.

(27) PVinT (B), 45. 3: skyes bu thams cad.

(28) PVinT (D), 41a^{7}-b^{1}:「(知覚される）対象であると言うならば，このとき文章の意味は次のようになる:——『知覚の対象が存在するから，それゆえに現量はそれ（＝対象）に到達せしめる（＝欺くことがない)』と。このような意味を述べても，（それは）『分別されるべき不可見（parokṣa）な対象は存在せず，それゆえに比量によって知覚されない』と述べることになり，またそれゆえにいかなる対象も現量されるものとなり，それのみが存在する（ことになる）から，すべての対象は現量されるものとなり，それゆえに，すべて（の対象）がすべて（の人）によって知覚されることになろう。」(don yin no she na, deḥi tshe ṅag gi don ḥdi yin te, gaṅ gi phyir mthoṅ baḥi don yod pa yin pa deḥi phyir de mṅon sum gyis thob par byed do shes bya ba yin la don ḥdi bstan pa na yaṅ rnam par brtag par bya ba lkog tu gyur paḥi don ni yod pa ma yin te, des na de rjes su dpag pas mthoṅ ba ma yin no shes brjod par ḥgyur shiṅ de las kyaṅ don gaṅ shig mṅon sum du gyur pa de kho na yod pa yin paḥi phyir don thams cad mṅon sum du gyur la, deḥi phyir thams cad* thams cad kyis mthoṅ bar ḥgyur ro. * *P* は thams cad を欠く。*C* によって補った。)

(29) PVinT(D), 41b$^{3-4}$:「これは『知なる知覚が存在するから，それゆえに，知覚されるべき対象に到達する（＝欺かれない)』という意味である。」(gaṅ gi phyir mthoṅ ba śes pa yod pa deḥi phyir mthoṅ bar bya baḥi don thob pa yin no shes bya baḥi don ḥdi yin no*. * *P* の na を *C* によって訂正。)

(30)-(30) PVinT (D), 42a$^{2-7}$:「それゆえにというは，結論（を述べる語）である。

れ（＝対象）と関係する（＝知は対象から生じる果である）と言われるべきである[30]。そのこと（＝対象から生じる果であること）は，果証因や自性証因にもとづく比量においても同様であるから，比量は量の特相をもたないことはない。

[IVa] (40.1) そのうち，

現量は分別（kalpanā）を離れ，迷乱（bhrānta）がないものである。

翳（timira），（燃え木等の）迅速な回転（āśubhramaṇa），航行（nauyāna）等（に起因する感官の）乱れによる迷乱が生じておらず，分別のない知が現量

因果関係（＝現量が対象から生じる果であること）がなくては，他なる知によって他なる実有（＝対象）は決知されない（＝全く関係のない知によっては対象は決知されない）から，どうして（対象に）到達しえるであろうか。（到達できない。）それゆえに，“他なる知”の存在によって，“対象と呼ばれる他なる対象”の存在が決知をもって許されるからには，所確立・能確立の関係（vyavasthāpyavyavasthāpakabhāva）が承認されるべきである。次のように言われる。実有の自相の把握それ自体もそれ（＝対象）から生じるからこそ，所確立（vyavasthāpya）である。（対象から）生じることがなくしては，他なる対象を必ず把握するというまさにこのことは確立しない。それゆえに，それ（＝対象）の自性を把握するということは，それ（＝対象）の果であること（に他ならない）。それゆえに，どうしてそれ（＝対象から生じる果であること）が否定されようか。それゆえに，現量が決知した対象に到達できる根拠は，それが（対象から生じる）果であることである。」（deḥi phyir shes bya ba ni mjug sdud pa ste, gaṅ gi phyir rgyu daṅ ḥdras buḥi ḥbrel pa spaṅs na don gshan du gyur paḥi śes pas don gshan du gyur paḥi dṅos po ṅes pa ma yin paḥi phyir ji ltar ḥthob par ḥgyur te, deḥi phyir don gshan du gyur paḥi śes pa yod pa las don gshan du gyur paḥi yul shes bya ba yod par ṅes pa daṅ ldan par ḥdod pas gshag par bya ba daṅ ḥjog par byed pa dag ḥbrel par khas blaṅ bar byaḥo. ḥdi skad brjod pa yin te, dṅos poḥi raṅ gi ṅo bo ḥdzin pa de ñid kyaṅ de las skyes pa ñid kyis rnam par bshag par bya ba yin te, skyes pa spaṅs nas ni bzuṅ ba tha dad pa la ṅes par ḥdzin pa shes pa ḥdi ñid rnam par gnas pa ma yin no. deḥi phyir deḥi raṅ bshin ḥdzin pa ñid kyaṅ deḥi ḥbras bu yin pa deḥi phyir ji ltar de spoṅ bar byed, deḥi phyir mṅon sum gyis ṅes par byas paḥi don thob par nus paḥi rgyu mtshan ni deḥi ḥbras bu ñid yin no.)

である。

[IVb] (40.5) では，その分別とは何か。

分別 (kalpanā) とは名辞をもった (abhilāpin) 知である。

分別とは，名辞と結びつく可能性のある顕現 (ābhāsa=形相 ākāra，表象) をもった知である。

感官知にはそれはない。

なぜならば，対象の力によって生じるから。(4)

なぜならば，対象 (=色等) の力によって生じるそれ (=感官知現量) はそれ (=色等) の自相のみに従うから。

[IVc] (40.13) 対象 (=色等) に語が存在することも，また (色等の対象が) それ (=語) を自体とすることもない。もしそのようなことがあれば，それ (=色等の対象) が (感官知に) 顕現するとき，それ (=語) も (同じ感官知に) 顕現する (と許される) でもあろうが，(しかしそのようなことはない[31]。) (もし色等を認識する知に "語の形相" が知自身の因によって生じる——色等によって生じるのではない——と言うならば[32]，しかし) 知の法であるこれ (=

(31) PVinT (D), 50a^{8}-b^{4}; PVinT (B), 56. 3-5 によれば，文典派は，現象した対象は語を本質とすると言い，数論学派によれば，種々 (の存在) は声唯等の5唯の変異であるから，対象は語を本質とすることになり，また，或る者たちは，語は対象の近くにあると言う。これらの説によれば，感官知が対象を認識するとき，語をも認識するはずである。したがって，感官知は語と結合した知——すなわち分別知——であることになる。いま，このような見解を破したのである。

(32) PVinT (B), 56. 7-57. 2:「もし『語を伴うことがない知は世の中に存在しない。すべての知は語をもつと知られる』(≒Vākyapadīya, I-124) と言われるから，語は知の生命 (jīva) であるので，"語の顕現 (=形相)" は知の因 (upādāna) のみから生じ，外境に依存しない。受のみのもののように，と言うならば，……」(gal te, sgra yi rjes ḥjug ma gtogs paḥi, śes de ḥjig rten na yod min, śes pa thams cad sgra daṅ ni, ldan pa ñid du yaṅ dag rig, ces pas sgra ni śes paḥi srog yin pas sgraḥi snaṅ ba ni śes paḥi ṅer len tsam las byuṅ gi phyi rol la rag ma las te rig tsam bshin no she na…) Cf. PVinT (D), 51a$^{3-6}$.

語の形相[33]）は（外境の）対象に無関係なもの（＝外境対象から生じないもの[34]）ではない。なぜならば，それは（外境の）対象（なる語音[35]）に結びつけられる（＝外境の語音として執せられる）から[36]。また，（もしそうでなければ）それ（＝外境対象と執される“対象の形相[37]”）からも対象（＝色等[38]）を認識しないという過失におちいるから。また（もし“語の形相”は外境の語音として執されるけれども外境の語音から生じたものではない，と言うならば，）それ（＝外境対象＜＝色等＞と執される“対象＜＝色等＞の形相”）（も同様に外境の色等から生じないことになるので[39]，それ）にもとづいて対象の認識

(33) PVinT (D), 51a[7]: chos sgraḥi rnam pa shes bya ba ḥdi; PVinT (B), 57.2: chos sgraḥi rnam pa ḥdi.

(34) PVinT (B), 57. 2: reg* pa ste skyes pa daṅ mi ldan pa. (* Text の rig を訂正。)

(35) PVinT (B), 57. 2: phyi rol don ṅag tu.

(36) PVinT (D), 51b[1-4]:「次のことが言われたのである:——感官知に顕現する“語の形相”は外境対象（＝外境の語音）として認識され，外境のものとして執される（から），それは外境（の語音）によって惹起されたものと承認されるべきである。“能取の形相”は内なるものであることは明白であって，外境のものと執されることがない（から，）外境によって惹起されたものではない（とみなすの）が合理である。（しかし）外境のものと執される知の法は外境（対象）によって惹起されたものである。たとえば，“青の顕現”のように。“語の顕現”も対象(＝外境の語音）として執される。」(ḥdi skad du brjod pa yin te, gaṅ gi phyir dbaṅ poḥi rnam par śes pa la snaṅ baḥi sgraḥi rnam pa* phyi rol gyi don yin par rtogs śiṅ phyi rol ñid du shen par byas pa deḥi phyir** phyi rol gyis byas par khas blaṅ bar bya ba yin la, ḥjig paḥi rnam pa naṅ du yoṅs su gsal ba phyi rol ñid du lhag par shen pa ma yin pa gaṅ yin pa de ni phyi rol gyis ma byas par rigs pa yin no. śes paḥi chos gaṅ shig phyi rol gyi don ñid du shen par byas pa de ni phyi rol gyis byas pa yin te, dper na sṅon poḥi snaṅ ba bshin no. sgraḥi snaṅ ba yaṅ don ñid du shen par byas pa yin no. * *P* の paḥi を *C, D* によって訂正。** *P, C, D* いずれも phyir を欠く。内容から補った。)

(37) PVinT (D), 51b[4]: phyi rol ñid du shen par byas paḥi rnam pa de las.

(38) PVinT (D), 51b[4]: gzugs la sogs paḥi don rnams; PVinT (B), 57. 3: gzugs la sogs paḥi gzuṅ don rnams.

(39) PVinT (B), 57. 3-4: gzugs sogs phyi rol don gyis ma byas paḥi phyir ro.

（と認めること）も（でき）なくなる過失におちいるから。

それゆえに（＝色等の対象は語を本質とせず，また語の所依でもなく，さらにまた知のなかの“語の形相”は外境の語音を必要としないのではないから[40]），これ（e.g. 色）が近くにあることによって知（＝眼知）を生ぜしめるときに，それ（＝色）の本質でない（語音）が，（語音と）必然関係にあるもの（＝語の形相）を（まさにその眼知に）成立せしめる（と言うこと）は合理でない。たとえば，味等は相互に（他方の形相を知に生ぜしめない）ように。

また，それ（＝色）の力によって生じる（眼）知は，他の対象（＝語音）に従わない（＝他の対象を把握しない）。味等の知のように。

（文典派や数論学派等が言うように）（語が）それ（＝色）の本質であるとしても，（語は眼知によって直接把握されることはない。）なぜならば，語は（語の知を生起せしめるのであって，それ以外の）他の知を生起させることが出来ない（はずである）から。また（もし生起させるならば）過大に適用される過失[41]におちいるから，（他の知を生起させることはありえない。）

一方，分別をもつのは意識（manovijñāna）である。（それは）対象の力が近くにあることを必要とせず，分別の習気から生起し，不確定な感官の対象を把握し，何らかの領納と結びつくことによって（領納と）共にか，あるいは別々に（語の対象を）把握する。

なおまた，

> 対象が働いているのに，もし感官知（の生起に）はさらになお，語との関係の想起が必要であるのであれば，かの対象は（感官知との間がその想起によって）切り離される（から，直接に感官知を生ぜしめない）ことになろう[42]。（5）

---

(40) PVinT (D), 52a$^{4-5}$: deḥi phyir shes bya ba ni gaṅ gi phyir don sgraḥi bdag ñid kyaṅ ma yin sgraḥi rtan kyaṅ ma yin la, sgraḥi rnam pa ḥdi yaṅ phyi rol gyi sgra la mi ltos pa ñid ma yin pa deḥi phyir. (≒PVinT (B), 57. 4)

(41) PVinT (D), 53b$^{6-7}$:「何か一つ（が把握されること）によってすべての対象が把握されるから。」(gaṅ yaṅ ruṅ ba gcig ñid kyis don thams cad ḥdzin paḥi phyir.)

(42) PV, Ⅲ-186（上掲拙著, p. 286）参照。

実に，（語についての）社会協約を定めたときに学習した名辞共相（abhilāpasāmānya）を想起しない者には“それ（＝名辞）を（対象に）結びつけること”（＝分別）はありえない。他の語のように。

また，対象が近くにあることによって内的潜在力（＝習気）の覚醒が起こされることなしに，特定の語を想起することは合理でない。なぜならば，それ（＝語の想起）がそれ（＝対象）によって起こされないならば，それの名辞を把握しない過失におちいるから。

それゆえに，想起によって切り離されるから，（感官知は）対象の働きの直後に作用する果でないことになろう。

それゆえに，（想起によって切り離されるという理由で）

> さきに（感官）知を（直接に）生ぜしめなかった（対象，e.g. 色）は，のちにも（直接にそれを生ぜしめないで）あろう。（対象はさきであっても，後であっても，直接にそれを生ぜしめないという点で）働きに相違がない（はずである）から[43]。

（対象は）それ自体としては相違しないので，能力（の点で）も相違がないから，一つ（の対象）が一つ（の感官知を生ぜしめる）働きをもったり，働きをもたなかったりすることは（ありえ）ないであろう。

> それゆえに，対象（＝色）がなくても眼知が（生じることに）なろう。（6）

対象（＝色）が（眼）知に対して直接的な働きをなさない（ことになる）から，また（直接的には）想起の覚醒に対して働く（ことになる）から，（眼）知はそれ（＝色）を――（それは眼知にとって何ら）役にたたない（のであるから）――必要としないことになろう。

対象が近くにあることによって，（感官）知が（直接に）生じるのであれば，（その）現量（＝感官知）は無分別と知られる。なぜならば，名辞（＝語）の想起によって妨げられないから。（未完）

---

(43) PV, III-188ab（上掲拙著, pp. 287-288）参照。

*PVin の Skt 断片はかなり発見されている。それらは以下に発表されている。

Tilmann Vetter, *DHARMAKĪRT I'S PRA MĀṆAVINIŚCAYAḤ*, 1. *Kapitel*: *Pratyakṣam*, Wien 1966 (Tib. Text の foot notes)

Ernst Steinkellner, *NEW SANSKRIT-FRAGMENTS OF PRAMĀṆAVINIŚCAYAḤ, FIRST CHAPTER*, WZKS XVI 1972.

Muni Jambūvijaya, *Jainācāryaśrī-Hemacandrasūrimukhyaśiṣyābhyām Ācaryarāmacandra-Guṇacandrābhyāṃ viracitāyāṃ Dravyālaṅkārasvopajñaṭīkāyāṃ bauddhagranthebhya uddhṛtāḥ pāṭhāḥ*, Studien zum Jainismus und Buddhismus, Gedenkschrift für Ludwig Alsdorf, SS. 130-140.

矢板秀臣，Tarkarahasya に見える引用文，三康文化研究所年報第16・17号，昭和60.
（同，ダルモーッタラの Pramāṇaviniścayaṭīkā の一資料——サンスクリット断片と試訳——，密教学研究第16号，昭和59）